

現地を訪問して想うこと

福島県会津東山温泉コース
09・文卒
石川 聡子

福島、この地を訪れるのに随分時間がかかってしまった。すでに、あの未曾有の大地震が起こってから1年以上経過している。地震直後、東北に行くことを何度も考えたが、結局は行かずじまいでズルズルときてしまった。仕事の都合がつかないなど色々と理由はあるのだが、それは単なる言い訳にすぎない。正直な話、放射能への恐怖がなかったというのは嘘になる。私は福島に向かうこと、そして福島産の食べ物を口にすることを避けていたのだ。

福島の人こんな私を快く受け入れてくれた。今回の旅で一番驚いたことが、会津の人が誰かに与えられるより先に与えていたことだ。風評被害で悩まされている状況からいえば、行き場の無い怒りややるせなさといった感情であふれていてもおかしくないはずなのに、遠くからよく来てくれたと笑顔で手を広げ、そして福島で思考錯誤しながら農作物を作り、それらを人々に届ける仕事について優しく語ってくれた。仕事に誇りをもっていることが言葉の端々から伝わってきて、また語るとき、その目はまっすぐ前を向いていた。「若い世代に引き継ぐためにあえて安売りはしない。」現実と向き合いながらしっかりと未来を見据えている様子だった。

福島を訪問するまで自分の無力さに嫌気がさしてさえもしていたが、今回の旅で関西在住の私でもできることがはっきりした。東北で作られた食べ物を積極的に食べる。これは実際に現地に赴き、生産者の声を直に聞き、自分の目でその安全さを確かめたという経験をふまえているからこそ可能になったことだ。そして私はもう一度福島を訪れたい。この国に原発が存在するかぎり、いつでも放射能という目にみえない恐ろしい兵器の被害者になる（なっている）可能性がある。もちろん同時にその加害者にさえなりかねない。人間であるがゆえの罪と向き合うために少なくとも私はそうすることでしか、この問題に自分なりの決着をつけることができないと強く感じている。次に訪れるときは私も与えられるより先に与える人でありたいと切に願う。